

近世の住居家構に見られる屋根形式 の変化について

白 木 小 三 郎

ON THE TRANSFORMATION OF ROOF STYLES OF DWELLING HOUSES AT RECENT AGE

By KOSABURO SHIRAKI

ここに屋根形式の変化というのは、一構の家屋に別の棟が取付いて、屋根構成が複雑化してくることを指している。即ち、ここでは、住居家構の二三の類型について、近世における屋根構成の複雑化（多棟化）の契機と意義を考えて見ようとするのである。

I

11世紀以降になると住宅建築史上、寝殿造と呼ばれる住宅家構の一典型が、宇津保物語 枕草子、源氏物語等の文芸作品、或は源氏物語絵巻、年中行事絵巻等の絵巻物類に表れてくる。即ち当時は寝殿

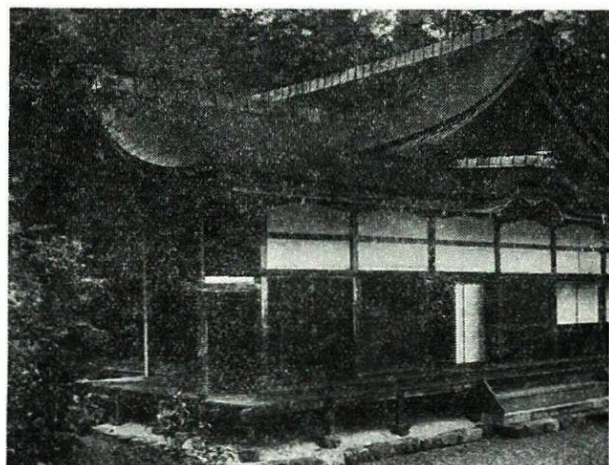


写真1 円城寺三井寺の光浄院客殿主殿と中門廊

は主人の、対屋は家族の住む場所、大炊殿は釜屋として、大体、構成家族毎に、又生活機能毎に、家屋を別にした所謂別棟式住居家構であった事がうかがわれる。然し12世紀頃になると、この典型も対屋が失れたり、或は不規則に寝殿に取付いたりして、主に主殿と中門廊を中心にした住居家構になってくる。これは構成家族的に、又生活機能的に、一構の内部が間仕切られてくると軌を一にしており生活様式的にも、公家的なものから武家的なものへの推移期になっている。例え

ばこの時期は母系共同体の要素であった母子小家族を単位とした家族構成から、父系的総領制を基盤とする家族構成への歴史的な転換期に当たっている等である⁽¹⁾。即ち中世に於てはこのような寝殿様家構から主殿様家構への転換の過程に別棟式住居家構の一構多棟化が考えられる。大鏡巻五に、この間の変遷を、“……御家作くらせ給えるさまなとよ、寝殿対渡殿などはつくりあひ、桧皮ふきあわする事も、この院（華山院、986—1007）のしいでさせ給えるなり、昔はべつべつにて、あはひにひ（樋）をかけてぞ侍りし……”と記している。又家屋雑考（一）の主殿の項にある、“されば主殿の造方とて、別に定まるあるにはあらず、土岐家聞書に、主殿の唐破風と見え、三好義長朝臣亭御成之記に、主殿の破風新に申し付けるなど見えて、寝殿の造りかたにあらず、対屋造なるにてもしるべし……”の記事からも、主殿造えの転換形式として多棟化してくる事が知られる。その後、封建的身分制の要請から単に外観を整える形式として、城郭居館の建築が多棟化してきた事は改めて説明の要がない。

現在、地方の一般住居家構に見られる多棟的な屋根形式には大きく分けて二つの類型がある。即ち一つは梁行に、もう一つは桁行に棟が取付いて多棟化するものである。このような近世に於ける一般住居家構に表れる多棟化傾向を、先述の住宅形式史上表れる多棟化への変遷を背景として考えて見ようとするのである。

II

近世の庶民生活史料として有名な肥後藩の“人畜家屋敷改帳”（寛永10年 1633。以下人畜帳と略称）⁽²⁾には、当時の肥後地方の住居家構について、次のような形式で記録されている。

第 1 表

寛永十年二月十三日 合志郡竹迫町人畜改帳の内（竹迫手永惣庄屋家の記載例）

高 三十一石三斗四升

一 男女合。二十一人。内	一人ハ庄屋八郎左エ門尉 二人ハむすこ。内一人十五より下 二人ハむすめ。オ十五より下 一人ハ女房 一人ハよめ	三人ハなこ、源左エ門尉 源七 争七 五人ハ女房。むすめ 作蔵 三人ハ下人、彦右エ門 甚吉 一人ハ下女、 一人ハうば、オ七十一	八郎左エ門尉
一 牛馬五疋。内	二疋 牛 三疋 馬		同 人
一 家数十五軒。内	三間ニ五間。御座敷 二間ニ三間。御馬屋 二間ニ六間。御蔵 二間ニ七間。本屋 二間ニ五間。かまや 二間ニ三間。子供べや 二間ニ二間。自ぶつどう 二間ニ三間。牛馬屋	二間ニ四間。はいや 二間ニ四間。かん物蔵 九尺ニ四間。下人へ屋 二間ニ三間。なこ屋 二間ニ三間。同 二間ニ三間。同 二間ニ三間。同 二間ニ三間。同	同 人
一 屋敷 八間ニ三十間 八畝	一 九間ニ十間 三畝		同 人

寛永十年二月十三日 合志郡野付村人畜改帳の内（一般百姓層の記載例）

高 二十八石五斗一升			
一男一女合十一人。内	一人ハ百姓弥右エ門 一人ハむすこ 一人ハむすめ。年十五より下 一人ハよめ 一人ハ女房 一人ハ母親	一人ハなこ。二右エ門 一人ハむすこ。年十五より下 一人ハちち親 一人ハ母親 一人ハ女房	弥右エ門
一 牛馬四疋。内	牛 一疋 馬 四疋		同 人
一 一家数九軒。内	二間ニ四間。本屋 二間ニ三間。かまや 九尺ニ二間。牛馬や 九尺ニ三間。かう物蔵	二間ニ五間。なこ本屋 一丈ニ三間。かまや 八尺ニ二間親屋 九尺ニ三間かう物蔵 九尺ニ二間牛馬や	同 人
一 屋敷 十四間三尺 九畝 十九間	一 十間ニ 四畝 十二間		同 人
高 七石九斗三升七合			
一 男女合。二人。内	一人ハ百姓彦右エ門 一人ハ女房		彦右エ門
一 家数一軒	九尺ニ三間。本屋		同 人
一 屋敷 六間ニ 三畝十二歩 十七間			同 人

これらの記録によると、家族数と共に家屋数（一屋敷の家屋数）が、一般に多く、しかも夫々独立的な世帯の名子を含んでいる事が知られる。しかし、その質量共に多い家屋数を世帯単位に割当てて見ると大体単一家族毎に夫々の生活機能を充たす位の、別棟の家屋から成り立つ住居形式であった事がわかる。又、（第2表）の二つの村落⁽³⁾の人数と戸数の変化の例から、この地区の近世初期に於ける家族構造と居住状態の推勢の一半が考えられる。

第 2 表

（一）肥後国合志郡升迫手永上庄之内二子村の場合

・慶長十三年（1608）十一月の検地帳によると	戸数 21（家屋数 34） （屋敷地 4 町67）	人数 38	牛馬 10
・寛永十年（1633）正月の人畜帳によると	戸数 9（家屋数 113） （屋敷地 2 町21）	人数 111	牛馬 46

（二）肥後国玉名郡蔵尾手永原加村の場合

・寛永十八年（1641）八月の人畜帳によると	戸数 31（家屋数不明）	人数 218
・慶安二年（1649）二月の宗門帳によると	戸数 32（ // // ）	人数 248

先づ二子村の場合、約30年間に、家屋数、人数、牛馬共約3倍に膨張しているのに、戸数は半分以下になっている。即ち検地帳の21戸の内、2軒又は3軒の家屋数を持っている8人は、人畜帳の庄屋及び百姓等9人の名請人の当代か先代に当たっているのである。然かも、その他の検地帳記載の一軒持は、検地帳の性格から考えて、総てそれら名請人層の名子又は傍系家族で、名請人層の屋敷内に居住家屋を持っていたものと見られる。次の原加村⁽⁴⁾の場合は名請人層を基準とした戸数に対して、それ

第3表の1

寛永十年肥後藩人畜改帳記載ヨリ

身 分	名	建 物 別	建物規模	摘 要	
庄 屋	次 右 エ 門 尉 16人 内1.庄屋次右エ門尉 2.名子 2.むすこ、15迄下 {七蔵親 1.むすめ 2.同左エ門 1.女 房 {七助郎次 2.女 房おれ 1.下 人へ 1.手 な 2.下 女	本かへ自 お稲馬番 は名間名 同	ま 屋 仏 や も 堂 く て 家 い ら 子 子 馬 や 子 家 家	2間0×5間0 2.0 ×6.0 9尺 ×4.0 9尺 ×2.0 2.0 ×3.0 2.0 ×4.0 1丈2尺×3.0 9尺 ×3.0 1丈2尺×3.0 2.0 ×4.0 9尺 ×3.0 1丈1尺×3.0 9尺 ×2.0	家数 15 2軒 屋敷 1反2畝 (13.0×30.0) 2軒
肝 煎	孫 左 エ 門 尉 11人 1.肝いり孫左エ門 1.名子 1.おとと勝左エ門 1.甚兵へ 2.兄弟ノ女房 1.う 房 1.母 2.う ば 2.むすめ	本か自へ稲馬名 同稲馬	ま 屋 仏 や く ら 子 ま や か く ら く ら く ら く ら	2.0 ×5.0 2.0 ×4.0 9尺 ×2.0 9尺 ×3.0 1丈 ×3.0 9尺 ×3.0 2.0 ×4.0 9尺 ×3.0 9尺 ×2.0 6尺 ×2.0	家数 11 2軒 屋敷 1反 (15.0×20.0)
頭百姓	次 郎 左 エ 門 尉 5人 1.頭百姓次郎右エ門 1.むすめ 1.女 房 1.おや浄慶 1.母	本かお稲馬	ま 屋 や く 家 く ら く ら く ら く ら	2.0 ×4.0 1丈 ×3.0 2.0 ×4.0 9尺 ×2.0 7尺 ×2.0	家数 5 屋敷 1反12歩 (17m2尺×18.)
小百姓	惣 右 エ 門 5人 1.小百姓惣右エ門 2.むすこ、13迄下 1.女 房 1.おや形部左エ門	本かお馬	ま 屋 や い へ く ら く ら く ら く ら	2.0 ×4.0 1丈 ×3.0 8尺 ×3.0 7尺 ×2.0	家数 4 屋敷 4畝6歩 (10.0×12間3尺)
小百姓	久 兵 エ 4人 1.小百姓久兵エ 1.むすこ、13 1.むすめ 1.女 房	本か自馬	ま 屋 仏 や く ら く ら く ら く ら	2.0 ×4.0 1丈 ×4.0 9尺 ×2.0 9尺 ×2.0 1丈 ×4.0	家数 4 屋敷 7畝15歩 (15.0×15.0)
頭百姓	忠 右 エ 門 5人 1.頭百姓忠右エ門 1.むすこ 1.女 房 1.う ば	本かへ稲馬	ま 屋 く ら く ら く ら く ら	2.0 ×4.0 9尺 ×2.0 9尺 ×3.0 9尺 ×2.0	家数 5 屋敷 6畝15歩 (13.0×15.0)
小百姓	久 左 エ 門 5人 1.小百姓久左エ門 1.しほりくうや 2.女 房 1.う ば	本か紺稲馬	ま 屋 へ ら く ら く ら く ら く ら	2.0 ×4.0 2.0 ×4.0 2.0 ×3.0 1丈 ×3.0 9尺 ×2.0	家数 5 屋敷 5畝 (10.0×15.0)
小百姓	吉 蔵 7人 1.小百姓吉蔵 1.名子 1.おとと、13 1.八郎房 1.おや又右エ門 1.お 意 やまい物 1.お 宗 1.う ば	本名同自へ	子 屋 か 家 仏 や ノ ま ど う や	2.0 ×3.0 2.0 ×4.0 9尺 ×3.0 9尺 ×2.0 9尺 ×3.0	家数 5 屋敷 1反6歩 (10.0×30間3尺)

第3表の2 明治十年西南戦争焼失家屋調ヨリ

区地別	氏名	建物	建物規模	建坪	摘要
第五大区 八小区 (上生村)	安武夫一郎	居家上	4.4 × 5	26.5	内24.0 本家地下屋 萱葺 下同
	安武勝治	下	2.5 × 5	13.0	——
	竹野惣平	下	2 × 5	14.0	// 13.0 他下屋 竹瓦
	安武新三郎	下	2 × 2	13.0	// 11.0 // //
	安武瀬平	上	2 × 5	13.0	// 11.0 // //
	加藤親致	上	4.5 × 5	27.0	// 24.7 // 萱葺
	同居	上	3.5 × 9	40.75	// 31.5 // 萱葺
	安武徳平	上	2 × 4.5	20.0	// 9.0 本家地下屋 萱葺 竹瓦
	大島太三	上	2.5 × 6.5	17.0	——
	嶋松長八	中	2 × 5	14.5	// 10.0 // 他下屋 萱葺
	大島午吾	上	2 × 5.5	15.0	// 11.0 // //
	大島幸三郎	下	4.9 × 5.5	36.95	// 35.7 // //
	安武彦三	中	2.5 × 3.5	36.95	// 35.7 // //
	安武彦三	中	5 × 5	41.2	// 36.2 // //
	安武幸平	上	2 × 2.5	36.45	// 28.5 // //
	安武幸平	上	2 × 2	36.45	// 28.5 // //
	安武夫一	中	4.5 × 5	25.25	// 20.5 // 萱葺
	安武常七	上	3 × 6.5	28.7	// 28.2 // //
	上村幸七	上	4.5 × 5	22.5	// 7.0 // 他下屋 竹瓦
	同居	下	3 × 7.5	8.0	// 7.0 // 他下屋 竹瓦
	上村幸八	中	2 × 3.5	20.75	// 16.25 // //
	上村角次	中	2.5 × 6.5	30.0	// 23.0 // 萱葺
	岩下猛文	中	4 × 5.5	30.0	// 23.0 // 竹瓦
	同居	中	2 × 3	8.0	// 7.0 // 萱葺
	安武常平	下	2 × 5	11.0	——
	安武常雄	中	2 × 5	38.45	// 7.0 // 萱葺
	平山安治郎	上	2.5 × 7	10.0	// 19.0 // 他下屋 萱葺
	安武源七	上	2 × 4.5	22.75	// 23.0 // //
	安武茂三郎	中	2 × 6	20.75	// 16.5 // //
	安武伝次	中	2 × 3.5	20.75	// 13.0 // 竹瓦
	安武善平	上	2 × 7	31.75	// 25.0 // 内2.5坪竹瓦
	安武徳太	下	3 × 5.5	7.6	——
	安武安平	上	2 × 5	16.0	——
	菊川久三郎	下	2 × 5	23.25	// 20.5 // 他下屋 萱葺
	菊川幾太	上	3 × 6.5	11.75	// 10.0 // //
	田上又七	下	2 × 5	12.5	// 10.0 // //
	田上彦一	下	2 × 5	12.5	// 10.0 // //
	徳永益三	上	2 × 4.5	13.0	内9.0 本家他 竹瓦
	徳永源九郎	下	2 × 5	15.0	// 10.0 // //
	小佐井又平	上	2.5 × 7.4	38.75	// 26.6 // //
	小佐井作平	上	2 × 5	12.0	// 11.0 // //
	小佐井市蔵	中	2 × 6	15.0	// 12.0 // //
	小佐井伊平	中	2.5 × 7	22.0	// 17.5 // //
	小佐井耕七	上	2 × 7	18.5	// 14.0 // //
	同居	上	2 × 4.5	10.0	// 9.0 // //
	小佐井幸平	中	2 × 4.5	24.45	// 18.5 // 内1坪井戸
	森清次郎	上	2.5 × 7	19.0	// 14.0 // 他下屋 萱葺
	安武藤作	上	2 × 4.5	23.5	// 21.0 // //
	森弥三	上	2 × 2.5	8.0	——
	山内彦三郎	下	2 × 3.5	11.0	// 9.0 // 他下屋 萱葺
	安武斌雄	上	2 × 4	40.0	// 33.25 // //
	森慶八	中	3.5 × 7.5	34.25	// 31.0 // 二階付
	森栄三郎	上	4 × 5.5	46.75	// 38.0 // //
	森勝作	上	6 × 5	15.0	// 12.0 // 竹瓦
	小佐井幸七	中	1.5 × 2	9.0	——
	小佐井次三郎	下	2 × 6	11.0	// 11.0 // 他下屋 萱葺
	重田平七	上	2 × 4	20.0	// 12.75 // 他下屋 萱葺
	松岡利三郎	下	2 × 5	45.6	// 35.5 // 他下屋 萱葺
	小佐井藤七	上	3 × 5	14.0	// 13.0 // 他下屋 萱葺
	小佐井市平	上	1 × 3	12.0	// 11.0 // //
	堀清七	上	2 × 5	8.0	// 8.0 // //
	角田巳三郎	中	2 × 3.5	19.0	// 14.75 // 竹瓦
	堀作七	上	2 × 8	21.0	// 17.0 // //
	小佐井利一	上	2 × 4	13.0	// 9.0 // //
	堀俊平	上	3 × 5.5	22.0	// 17.5 // //
	森源平	上	3 × 5	28.0	// 25.0 // //
	堀次七	上	5 × 3.5	26.0	// 23.5 // 二階
	堀惣平	上	2 × 3	7.0	——
	松岡平徳	中	3.5 × 4.5	16.0	——
	同居	下	2 × 4	9.0	——
	松岡元平	中	2 × 4	9.0	——
	松岡平三郎	上	3 × 6.5	23.75	// 20.5 // 他下屋 萱葺
	堀益三郎	上	7 39	701	——
	今坂忠太	上	7 39	701	——
	小佐井儀平	上	7 39	701	——

第3表の3

“西南役焼失家屋調” に表れる姓別鍵屋数

姓 別	安 武	竹 野	加 藤	大 島	鶴 松	上 村	岩 下	平 山	菊 川	田 上	徳 永	小 佐 井	森	山 内	重 田	松 岡	堀	角 田	今 坂	
戸数	19	1	1	3	1	3	1	1	3	2	2	12	5	1	1	5	6	1	1	
鍵屋 棟数	6			1								1	2			1	1			12

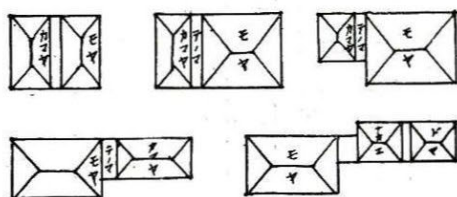
らが含んでいる名子、傍系家族等の増加の様子を示してい。又先の二子村の例からは屋敷地の縮小に対して家屋数の増大、即ち屋敷内の建蔽率の高くなって来る事をもうかがいうる。(4)

その後の、この地区の家構を示す史料に“西南役焼失家屋調”(5)がある。即ち“人畜帳”が肥後地方の近世初期に於ける農村の生活構造の概要を表しているのに対し、この“焼失家屋調”は近世末期の住居家構の輪廓を示している。この内、西南戦争での最激戦地田原坂の東隣で、全村焼失の第五大区八小区の上生村等は寛永の“人畜帳”にも集録されている数少い例である。

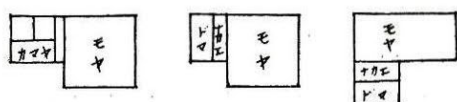
(第3表)はこの二つの史料を対比させ、その間の住居家構の変遷を比較したものである。丘陵地区で、田方が畑方の五割(6)にも満たない、これらの農村は井沢蟠龍(1668~1730)の“肥後の記”や寛政(1780)の手永手鑑等によっても、この間に於ける生活条件に大きな変化は考えられない。即ち家屋数では55軒から69軒と14軒の増加しか見られない。然し総ての家が居家一構だけになっているが下屋が発達し、特に二つ棟(“鍵屋”又は“二つ屋根”)になっているものが12軒も見えている。“人畜帳”に示されている名子層が独立し、(本屋、かまや)(名子屋、かまや)と、世帯毎に分離し、その上、機能的に別棟であったものが、次第に連結してきた事を表している。しかも旧庄屋、肝煎、頭百姓等に相当する家系の居家は“鍵屋”、“二つ屋根”(7)になっているのに、旧名子層、外来者等の居家は、下屋は付いてきても単純な一つ棟の四注形式に止まっている事を示している。

このような、下屋の付け下げ、棟の連結等、居家家構の具体例は、同じような畑場農村である菊地郡(大津手永)南方村の“焼失調”にも見られる(第4表)。この場合、居家が二つ棟(“鍵屋”、“二つ屋根”)になっているものの多いのは勿論、小屋を3~4軒と多く持っている家のあるのは、刈物蔵(8)等、作業、収納場としての小屋以外に旧名子屋等の名残りが見られる。即ち、これら肥後の丘陵畑場地区の“西南役焼失家屋調”には肥前、肥後、その他北九州一般に卓越している“二つ屋根”“鍵屋”(“くどや”)への過渡的な住居家構が見られる。又鹿児島県下、特に薩南諸島から大隅半島えかけて所謂“南島”型民家と称して(9)、(第1図)のような母屋と釜屋とが別棟になったものから、その間が樋で連絡されたもの、(“二つ屋根”)鍵形に連結したもの等の推移形式が見られる。これは南九州、特に旧島津藩に於ける在方組織及

母屋と釜屋との並列した別棟形の例



別棟より一棟形への変化



第1図

第 4 表

村名	氏名	建物	規模	建坪	屋根別坪数	屋根形式	建物配置 (一部間取)
第五大区 二小区 (原水村)	士 佐藤 忠徳 (341)	居家	間 間 4. × 8.	43.	本家 32坪(萱) 下屋 9.5 (瓦) // 1.5(竹瓦) 本家 28.5(ワ) 下屋 8.75(瓦)		
	土 蔵 小屋	土蔵 小屋	(4. × 4.5 3. × 3.5 2.5 × 3.5 2. × 3. 2.5 × 5. 2.3 × 4.76	37.25 (鍵) 8.75 6. 15. 10.94			
士	広吉 宗運 (342)	居家	2.5 × 5. 2.3 × 4.76	15. 10.94	本家 12.5(萱) 一部二階 下屋 3. (瓦)		
士	原田 明春 (339)	居家	5.5 × 7.	48.25	本家 38.5(萱) 下屋 9.75(ワ)		
士	松本 邦重 (338)	居家	(3.5 × 6. 2. × 5. 3. × 3. .6 × 1. 2.5 × 4.	48.75 (鍵) 9. 6. 10.	本家 31. (萱) 下屋 17.75(瓦) (ワ) (ワ) (ワ)		
平	秋山 延邑 (362)	居家	(5. × 5.15 2. × 2. 2. × 3. 1. × 1.5	35.25 (鍵) 6. 1.5	本家 29.75(萱) 下屋 5.5 (ワ) (ワ) (ワ)		
平	大山 真清 (361)	居家	(5. × 5. 2. × 2. 2. × 6. 2. × 3.5 2.31 × 5.75 2.3 × 3.5	34.9 (鍵) 12. 7. 13.3 8.05	本家 29. (ワ) 下屋 5.9 (ワ) (ワ) (ワ) (ワ) (ワ)		
平	村田 範保 (359)	居家	1.5 × 3.	13.82	本家 4.5 (ワ) 下屋 9.32(竹瓦)		
平	高橋 茂作 (359)	居家	6.45 × 6.5	46.1	本家 41.5(ワ) 下屋 4.6 (ワ) (ワ) (ワ) (ワ) (ワ)		
平	秋山 勝蔵 (357)	居家	3. × 6.5	21.12	本家 19.5(ワ) 下屋 1.62(ワ) (ワ) (ワ)		
平	大山 兼次 (356)	居家	4.5 × 7.	37.5	本家 31.5(ワ) 下屋 3.95(ワ) 2.25(ワ) (ワ) (ワ)		
平	金森 信正 (355)	居家	1.5 × 3.	7.5	本家 4.5 (ワ) 下屋 3. (ワ) (ワ) (ワ)		
平	高橋 綱寛 (354)	小屋	2.5 × 5. 2.5 × 5.	13.5 14.5	下屋 1. (ワ) 下屋 2. (ワ)		
平	本田 亥一郎 (353)	小屋	2. × 3. 2. × 3.5	6. 7.	(ワ) (ワ)		
平	本田 忠久 (352)	居家	2.5 × 6. (3. × 5. 2. × 2. 2.31 × 4.5 2. × 3. 2.3 × 5. 1.5 × 3. 1. × 1.5	39.4 (鍵) 10.4 6. 11.5 4.5 1.5	本家 34. (ワ) 下屋 5.4 (ワ) (ワ) (ワ) (ワ) (ワ) (ワ) (ワ)		

び農民対策の前近世的な所以を物語っているといえよう。即ち北九州の細川、黒田等の諸藩が、近世初期に領主として新しく入部したのに比して、島津家は鎌倉以来、大隅、薩摩の守護職であり、そのまま近世の領国大名になったのである。従って地頭に従属する被官家来等の開拓にかかる“名”を背景とした強力な在方組織を築き上げ、それが近世の藩政期にもそのまま踏襲されていた。即ち南九州地方の中世的な在地構造の伝承を考えると、所謂“南島型”の別棟家構の類型は、近世初期の“人畜帳”記載の住居家構の形式に、或は近世末期の“焼失調”記載の住居家構の形式に、そのままつながるものと考えて差支えない。従って北九州に一般的な梁方向への多棟化形式“鍵屋”造（“くどや”）は、又南九州に見られる桁方向への多棟化形式“二つ棟”造向は、別棟式な住居家構の系譜の近世的展開といえる。

Ⅲ

寛文年間（1661～1672）越後東頸城郡松之山郷の豪族であった凌雲の“越後風土考”に、“当国は土地によりて家居の構へ方さまざまなれども山に抛り雪深き所にては、堅固なるを主として本家（母屋）一棟を建て、部屋、水屋、馬屋等は割すまいするもの而已、里方に至りては近頃、本家の外、部屋、水屋、馬屋等の中門、又は附下を構えるもの稀に見る所……”とある。

即ち当時、平野部（里方）の大きな構では“中門”の棟が、又一般には附下（下屋）が母屋の棟に取付いていた事が示されている。

正徳元年（1711）4月の会津藩の“覚”⁽¹⁰⁾には
“高壺石より五石迄、式間梁、或は式間半梁
行間六間迄を限り、下屋并式間に式間の厩中
門、但山郷は行間七間迄限候”とあり、

元文五年（1740）四月の村上藩（岩船郡）の
“達”⁽¹¹⁾には、

“柱長一丈四尺以下、屋根草葺、中門附下げ

無用、百姓は柱長別して低くいたし、総て簀子天井、土間たるべき事”とある。

前記の1～5石の百姓という所謂三反百姓層であり、これらの階層に所謂“中門”造を禁じなければならぬ程、当時に中層以上の農民住居として、このような梁行に多棟化する家構の一般的であった事を表している。“中門”の形式には夫々部屋部分、水屋部分、或は馬屋部分が棟を直角にして取付いている⁽¹²⁾。（第2図）（写真2.3）

しかも、これらの“中門”造は、上記の史料や次の（第5表）調査資料⁽¹³⁾から、近世初期には平野部に普遍的だったのが、次第に山間部に普及して、逆に近世末期には平野部に少なくなってきた事が、又積雪量の多い山間部程、母屋の前後に“中門”の取付いた複雑な家構の多い事が、理解出来る。



写真2 “中門造”家構の例

置賜(山形県)犬川村平源右エ門家

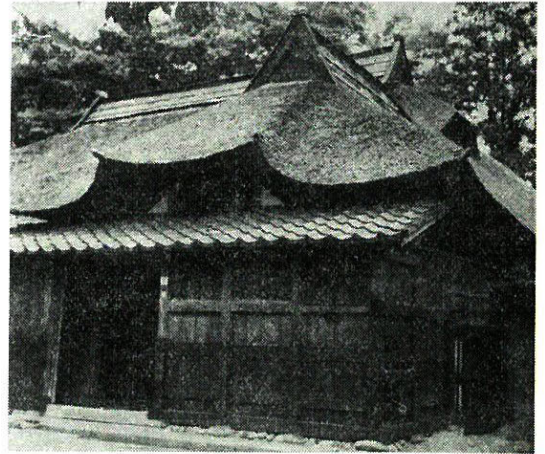
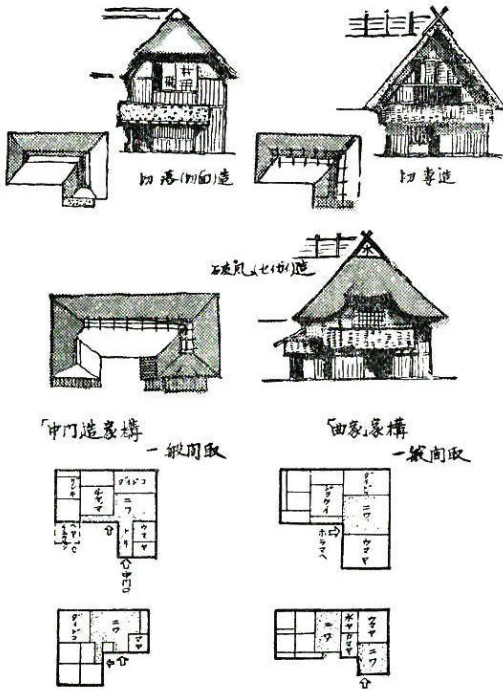


写真3 “中門造”家構の庭中門部分

庄内、西田川郡八栄里村大野大沼作兵エ家

第2図 “中門”造の家構

第5表

越後地方に於ける積雪量別“中門”造密度表

	郡市	町村	調査部落数	形態別中門造数					母屋数	母屋数に対する中門造の%	最深積雪量
				前中門	後中門	節後中門	その他	計			
1	岩手	船原	岩手	2	35	0	0	35	80	44%	1m 以下
2	蒲原	船地	○築	2	5	4	0	10	202	5	
3	北蒲原	塚野	○松	2	0	6	0	7	443	2	
4	西蒲原	野屋	○松	2	23	7	2	32	96	33	
5	西蒲原	野屋	○松	5	51	1	0	52	377	14	
6	岩手	船原	○神	1	37	0	0	3	82	49%	1~2m
7	蒲原	納松	○村	1	2	5	0	0	7	16	
8	蒲原	川条	○小	3	12	1	0	3	44	36	
9	蒲原	条	○下	3	64	3	1	0	68	77	
10	東蒲原	条	○下	4	22	1	0	0	23	9	
11	東蒲原	条	○下	3	18	3	5	0	26	17	
12	東南蒲原	条	○下	12	40	69	15	0	124	22	
13	東南	城沼	松中	2	73	5	7	0	85	51%	2m 以上
14	南魚沼	沼沼	之	1	4	11	11	0	26	58	
15	南魚沼	沼沼	之	6	50	21	89	0	160	52	
16	中魚沼	沼沼	大	1	66	4	14	0	84	62	
17	中魚沼	沼沼	外田	5	38	7	40	0	85	87	

1952~53 の新潟大、須藤教授の調査資料による。

(第6表)は上越後に隣接する庄内地方の一部の“中門”的多棟家構を家系を対比して見たものである。即ち開拓主であり、大庄屋職を世襲していた大沼本家だけが両中門形式であり、大沼家の血縁分家及び旧頭百姓の阿部、佐藤、奥山、丸山の四本家と奥山一郎家が夫々厩部分の片中門形式で、

第 6 表

庄内、西田川郡大野（八栄里村）の家系と家構の対比表

家 系				家 構				
文 久 以 前		文 久 以 後		文 久 以 前		文 久 以 後		
本 家	血 縁 分 家 非血縁	血縁分家	非血縁分家	中 門 造	その他	中門造	その他	
大庄屋 大沼作兵エ (写真3)	大沼三左エ門 // 久右エ門 // 九兵エ門 // 権右エ門	大沼利雄	大沼美弥子 秋庭義郎	両中門(200) 片中門(150) 片中門(120) 片中門(120) (絶家)	片底 片底	片中門(新) 片中門(70)		素屋造
	奥山源右エ門	奥山一郎 // 長太郎	奥山正助 // 幸助 清	片中門裏中門 片中門(120改)	片底(150) 片底 両底(150)		片底	素屋造 素屋造
	阿部治郎兵エ	阿部大助		片中門(150)	片底 両底(100)			
	佐藤文雄	佐藤省三 // 茂太郎 // 倉蔵	佐藤常代	片中門(120)	片底 片底(150) 片底(100)		片底(50)	新築二階
	丸山正吉	丸山栄太郎	高橋鉄五郎 // 豊吉	片中門(70改)	片底		両底(50) 片底(50)	素屋(80改)

部屋部分は下屋庇になっている。平面形式上は両中門と変るところがないのに、部屋部分、或は水屋部分（土間部分）を“中門”として棟を直角にして持つのと、単に下屋として軒先を延した形で取付けているのとでは、明瞭に家格差の表れとなっている。厩中門の二階は勿論、部屋中門の一部分までも隷属度は高いが、一応別世帯の独立した居住区をなしていた。即ち名主手作、地主手作が分解してくるようになって、これらの居住区の存在意義は薄れてくるのである。即ち、ここに近世末期になると一般平野部にはこのような家構の少なくなってきた所以があったのである。この中門形式は同じような近世に於ける後進地九州地方の、鍵屋形式に類似した多棟式家構であるが、居住空間、或は作業空間の拡大方式であった事、しかも名主層の生活に基準を置いた中世的な^{ジカテ}地方構造を背景とした住居家構であった事にも基本的な差異が見られる。

Ⅳ

中世から近世を劃する契機の一つに文禄或は慶長期の大閑検地がある。しかもこれは近世の在方、地方構造の——農民生活に一つの新しい動向を与えたものであるが、この時期の生活を具体的に理解するための史料は乏しい。家族構成、農村構造等の外廓を知らせるものとしては宗門帳の類もあるが、これは元禄期前後のもので、太閤検地の時代までは約100年の隔りがある。しかしこの100年間は近世を特性づけるもので、近世の性格を知る上に欠く事の出来ぬものである。寛永期の“万改帳”（前述

(第7表)は若江村の記載例であり、(第8表)は更池の本村全体を対比した例であるが、一般に家

一、高 百五十石七斗八合

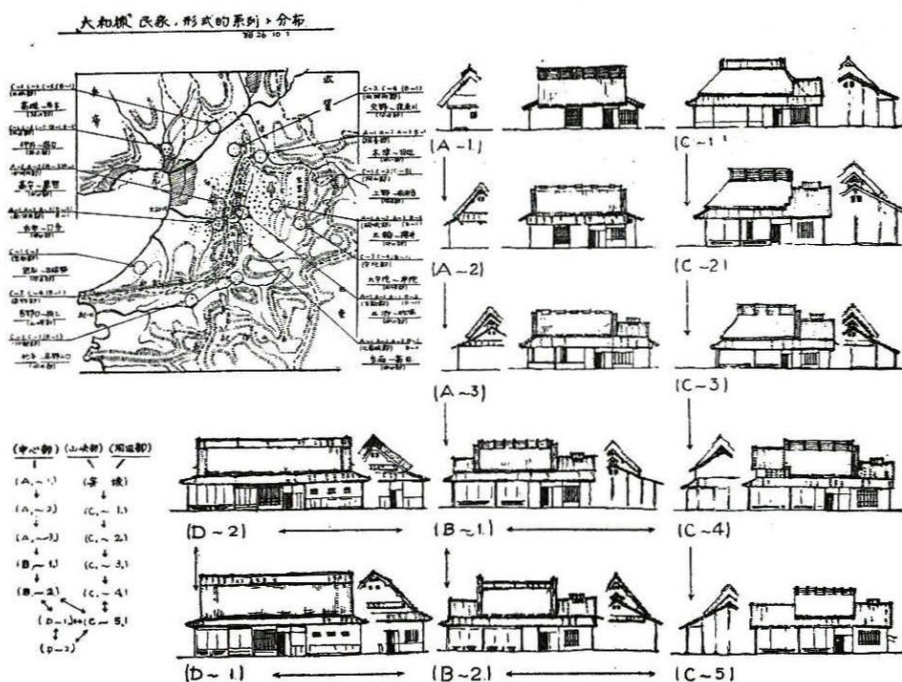
(19)

第 8 表

寛永二十一年 河 州 更 池 村 万 改 帳

登録人	石 高	人数	戸主, 配偶者, 子供					隠居, 傍系 父母兄弟	下 人			家	座 敷	小 屋	物 置	
			20	30	40	50	60		下	男	女					
庄屋 清右衛門 年寄 嘉兵衛	上23.05 中5.59	7 4	1 2						1	1	2	6 × 3 6 × 2.5	3.5 × 2.5	馬場内ニアリ 6 × 1.5 馬場内ニアリ 2 × 1	2 × 1.5	牛1疋 与兵衛 牛1疋 庄兵衛 作右兵衛 与三兵衛
与三兵衛 作右衛門 年寄 善二郎	中5.042 中8.383 中1.215	5 7 3	1 3 1	2 1 1		1 1 1						5 × 3 7 × 3 3 × 1		2 × 1 3 × 1		
仁兵衛 与兵衛 庄兵衛 二郎兵衛 久兵衛 市兵衛	上11.769 上20.694 上3.286 上2.198 上5.644 上1.788	8 11 7 3 2 6	3 5 5 1 2 3	1 1 1 1 2 3		1 1 1 2 2 2			2	2		6.5 × 3 7 × 3 5 × 2 5 × 2 5 × 2 2 × 1		2 × 1 4 × 1 6 × 1		
真言宗 多聞院	.28	2				1		1			1	5 × 3				

族数及び家屋数が極めて少い。一部下人層を持ち、下女を持っているものも見られるが、多くは、特に若江の場合は、単一家族になっている。従って家屋の数も少く、更池の場合、小屋の附属しているものが若干見られる他は本家一棟だけしか記載されていない。ただ庄屋は別棟の座敷を持ち、他の大高持も隠居屋を持っているのが見られる。若江の例の門屋は、更池の例の、小屋住層の独立した段階で⁽¹³⁾、更池と若江の地理的条件の差を示しているものと言えよう。例えば、若江村の庄屋長左衛門家の場合、相当大きな手作をしているが、21人の家族の内、可動戸口は13人であるから、自家耕作出来る面積⁽¹⁵⁾は3町9反となる。これを石盛にすると、50石強となる。従って100石近い耕地が小作



に出されていたことになる。その他、営農の集約化は、このような大きな貸付耕地によって多くの小屋住層が、小作人として、即ち門屋として、生活的にも一応独立し得た事を示すものといえよう。即ち若江の例の門屋は、更池の場合の小屋が独立の生活体となって、平面的には二つ間取、構造的には支間一つの所謂“納屋造”（小屋造）の形式で（第3図）の（A～1.2）（C～1.2）の段階に相当するのである。（第4図・写真4）

棟方向に、下屋を懸けて、一方では床面積を拡げて納戸を作って二つ間取に、一方では土間を拡げて釜屋を土間の内に取入れようとした形式である。桁行が5間以上の家構になると釜屋部分は独立した落棟になって取付いてくるし、7間以上になると床面積も拡大されて、四つ間取から六つ間取と座敷部分の落棟も取付いて（写真5）のような所謂“大和棟”型の多棟式家構になる。万改帳に示さ

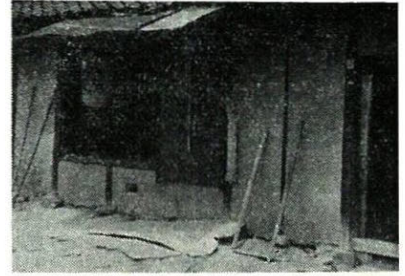


写真4

南河内、古市町碓井

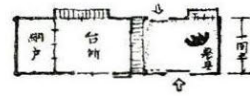
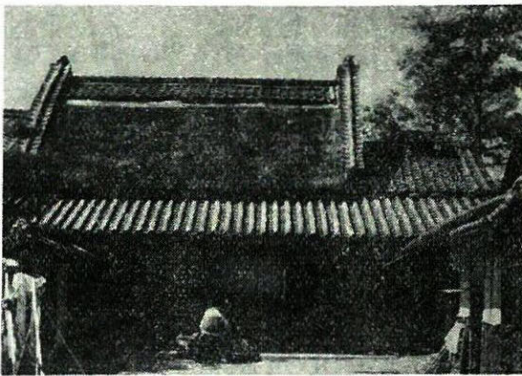
第4図 納屋造
写真4の間取図

写真5

れている住居家構は、小屋造（納屋造）から左右に落棟を持った大和棟形式までがそのままに方に於ける階層を示しているといえよう。

即ち（第3図）の現在見られる形式の系列的関連が、そのまま近世初期以来の階層的関連と見られるのである。この他、庄屋層の住居家構に見られた別棟座敷は、土農未分の生活条件から農民身分に定着されてくるにつれ母屋と連結して愈々多棟化してくる⁽¹⁶⁾事を表している。

即ち河内（大和）等の先進地域では、近世に於ける小農民の独立過程に、納屋造（小屋造）のような小規模家構が、居住空間、作業空間の拡大方式として所謂“大和棟”式に多棟化する。これと同時に一部豪農層に見られた別棟式家構には連結的な多棟化も考えられたのである。

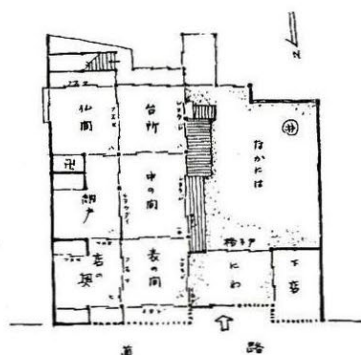
V

（写真6）は所謂大和棟家構の卓越している大和，高市郡今井町の今西家の西側姿図である。東側にはもっと複雑な入母屋の屋根形が取付いているが、（第5図）の平面形式からは、その棟の複雑さは連想出来ない。このような重ね妻の多棟入母屋屋根形式を、この地方では“八棟造”と称し、惣年



写真6

大和・高市郡今井町 今西邸現況(西側面)



第5図 写真6の間取図

近世に於ける生産規模、営農方式、或は家族構成等の推移、これに伴ふ身分的な上昇等による住居家構の拡大変遷には平面構成と屋根構成とは相関連しているものであった。しかし、今井町の例に見られるように、一般在方の住居家構も身分的な定着が永く、その上封建社会に於いて武家的な性格を帯びてくることによって、次第に平面構成も屋根構成も夫々別々に形式化され、ついには相互の発展的関連性を失ってしまふに至るのである。即ち、ここに、中世以来の主殿(居館)形式に表れた多棟の構成の系譜が、一般住居家構の形式につながってくることを理解するための端緒がある。

寄層は勿論、近世中期から有力な家持層の家構になってきたようである。然し当町の高木家系図の書込に、“世人称して三棟造”とある。又この今井町は東西約5町40間、南北約3町の寺内町で、大和軍記⁽¹⁷⁾によると

“今井村ト申廻ハ、兵部ト申一向坊主ノ取立
申新地ニテ候、此兵部器量ノ者ニテ、四町四
方ニ堀ヲ掘リ廻シ、土手ヲ築キ云々”

とある。又高市郡志料によると

“天正三年、河瀬宗綱ナルモノ、本願寺光佐
ノ命ヲ奉ジ、今井ニ来リ抛ツテ織田氏ニ抗ス、
後信長ト和シ、子孫土着ス”ともある。称念寺
文書の示す天正三年(1575)九月廿七日付今井惣
郷宛の信長の赦免状には、その和睦の条件とし
て“土居構崩之……”とあり当時の武装化して
いた村落の様子が理解される⁽¹⁸⁾。即ち、この
ような過程に、“三棟造”と称していた母屋の
左右に落棟の取付いた、所謂“大和棟”家構が
“八棟造”のような入母屋の重ね妻屋根の居館
的な家構になったものと考えられる。

文 献 及 び 註

- (1) 高群逸枝氏：“招婿婚の研究”
- (2) 日本近世史料：“肥後藩人畜改帳” 1～5
- (3) 二子村は丘陵部の農村の例
原加村は平野部の農村の例

- (4) 筆者：“近世における所謂 “鍵屋” 民家の一形成について”（日本建築学会論文報告集, 57号）
- (5) 熊本県立図書館蔵, “西南後焼失家屋調”（47冊）の内8冊には屋根形式建物配置等の概要は勿論, 一部間取図も添えてある。この調書は村落毎の被害による損害保証請求のための資料であった。
- (6) 熊本県農事試験場編：“昭和30年度, 県下農家一戸当り耕作田畑比率表”
- (7) 棟を平行にして間を樋をかけて連ねたもの（“二つ屋根”と称す）及『形に連結するもの（“鍵屋”或は“くど造”と称す）
- (8) 乾物蔵（かんもんぐら）とも書く。刈物（収穫物）を乾燥させ, 収納する場所
- (9) 野村孝文氏：“奄美大島の民家と鹿児島本土の民家との関係”（建築学会報告 29）
- (10) 若松市史（下巻）
- (11) 北蒲原郡史
- (12) 筆者：“中門形式—民家の一類型—について”（京都工専記念論文集 昭和23年度）
- (13) 須藤賢氏：“中門造民家の発生論的考察—越後を中心地域として”（人文地理学会発表 昭和28.11）
- (14)(15) 高尾一彦氏：“江戸前期における畿内村落の構成”（研究三）及同氏：“江戸時代の農村構成とその発展”（研究十六）
- (16) 筆者：“近世における在方の住居家構に関する研究”（一編 一章 二節）
- (17) 江戸時代の著作
- (18) 関野, 太田, 伊藤三氏：“今井町民家の編年”（建築学会報告 60）

SUMMARY

At present, Japanese farm house styles are classified roughly two types relative to their roof forms. One type is the roof form set cross ridges and the other type is the roof form set parallel ridges to simple roof. The former has the “Kagiya” (“Kudo”) style in Kyushu provinces and the “Chumon” style in “Ōu” provinces. The latter has the “Yamato-Mune” style at “Yamato-Kawachi” district.

The original form of the “Kagiya” style is “Nanto” dwelling form which houses are parted by the functions of life and a unit family. Since about the middle of recent age, these separated houses were combined to one appearance and were transformed into various ridgesl roof, while the “Nago” class were independent from the mediaeval rural constitution. On the other, the “Chumon” style was a method to enlarge living space and working space at recent age. But the original form of this style was the standard dwelling house of the “Myoshu” class at mediaeval.

The "Yamato-Mune" was also a farm house style enlarged this living space ("Zashiki") and working space ("Doma") since the middle of recent age. But since the early of recent age, the separated houses style of the "Shoya" class were combined to the "Yamato-Mune" style, while this class changed in rural standing.

When they kept on same standing in this part of the country, the roof form has cutted connection with the planning on their dwelling houses.